忠臣は二君につかへず、列女は二夫をへずとは、○略中　忠義の臣は二人の君につかへず、貞烈の女は二人の夫をへて嫁せず、貞女兩夫にまみへずといふもおなじ心なり、貞はみさほのさだかなるを云、烈は心ざしのはげしきを云、それ人はことなくてある時は、その心見えがたし、災難のきは、生死のさかひにこそ、よきはよく、あしきはあしき心ざし、そのかくれなき物なれ、○略中　忠臣貞女のみさほはいかなるうきふしをへても、たとひ身をすつるにのぞみても、人はともあれかし、われひとりは、露たがへじとおもひとりて、ふた心なき物なり、

〔伊勢平藏家訓〕五倫の事

一妻は夫をあがめゐやまひ、大切にして食物衣服などの內證の世話をやき、夫に對して、りんきねたみの心なく、夫一人の外には、他人といたづく事せず、夫のしかたは、いか程わろくとも、夫を恨みず、心替りせず、死すとも夫の家を出ずして、一すぢに夫の爲をおもふを、貞女といふ、是妻の法なり、

〔千歲のもとい〕夫主につかへ給ふは貞順の二ッ也、貞とは正しくいつまでもかはらぬこと也、されば女の遇不遇に操のかはらぬを貞女といひ、松の霜雪に葉がへぬを貞松と云、婦の德は柔順を貴ぶといへ共、又一ッ動かぬ貞烈の德有べき也、地の德は陰なれども、坤の卦には直方大と云へり、直は正しくしてまがらず、方は稜有て轉ずべからぬ也、順ははじめにもいへる如く、ゆるやかにして己を立てず、陰は陽に去たがふ道理を忘れず、夫主の指揮にしたがふをいふ也、夫婦の好は終身はなれず、房室の間に周旋するなれば、去らず〳〵なれなるゝことも、出やすきものぞかし、故に常々男女の別を正して、禮義を亂さず、敬愼を專らにして、夫主の心を求べき也、夫主の心を求るといふて、佞媚にして、いやしくも親べき事にはあらず、夫主若過有に當ては、顏色を和らげ、心を靜にして、諫べきことなり、